

## 「藝術家コロニーと古代魚」

彫刻家 石上城行

建築家で詩人の立原道造が学生時代から構想していた「藝術家コロニー」というビジョンがあります。今回そのビジョンを共有することを通じて、これからの芸術文化を考えるという企画のお話をいただきました。そこで私が考えたことは、本企画の舞台であり立原が構想した「藝術家コロニー」の候補に含まれていた別所沼の歴史でした。何故なら、私にとって立原氏の構想はあまりにも純粹に映り、そのビジョンに基づいて建てられた「ヒアシンスハウス」も子供の「隠れ家」のような印象をいただく一方、別所沼という環境には、雄大な時間の変遷を想起させる懐の深さを感じていたからです。実際 2500 年前の縄文時代にそこは海だったという説があります。仮にそれが事実だったとすると今、目の前に広がる景色は全て水の中ということになりますし、もしかすると人の目の高さを魚が回遊していたかもしれません。そんなイメージを具現化してみようということで「ヒアシンスハウス」の前庭に巨大な古代魚（シーラカンス）を制作することにしました。



制作した古代魚は全長 4m の大きさで、カラフルに塗装した木材を寄せ集めて造形しています。まず「ヒアシンスハウス」を借景に置いたスケッチを複数、描きました。それを基に寸法を割り出し、簡単な図面を引いてから骨格となるパーツを作成、そこへランダムに木片を貼り付けていくという手順で制作を進めました。出来上がった作品は、大きさがありながら威圧的でなく場所に溶け込むようにそこに存在し、観る者の想像力（イメージする力）を拓げることに成功したのではないかと考えています。制作の大部分はアトリエで行いましたが、最終的な仕上げは作品を現地に持ち込んで進めました。

ハウスの前で作業を行っていると公園を訪れる多くの方に話しかけられました。たわいのない言葉のやり取りでしたが、(コロナ禍ということもあり) 久しぶりに不特定の人とアートについて会話したことは思いのほか新鮮に感じられ、仮に「藝術家コロニイ」が実現していたらこんなやり取りが日常的に交わされたかもしれないと気づかされ、アートの必要性を改めて実感することができました。

今回の試みを終えて「隠れ家」についても気づきがありました。今、世界はコロナによる影響で他者との距離がうまく保てず、解決の糸口がわからないストレスにさいなまれています。そんな時にコンパクトな空間にこもって心をリフレッシュすることはとても大切な行為であると感じるとともに、人はどこかで常にそれを求めているだと気づきました。今更ですが「ヒアシンスハウス」は、そのための機能を過不足なく満たしていたのです。

そもそも立原が夢想した「藝術家コロニイ」を、構想した数十年後に「ヒアシンスハウス」という形で(直接関係のない人々が集まって)一部実現したことを考えると、人のイメージする力の偉大さや、そのイメージを伝えることの尊さを改めて認識せざるを得ません。したがって今、これからの芸術文化を考える際も、人のイメージする力を信じて愚直に伝え続けるしかない、という当たり前の事実をかみしめているところです。

